

シンポジウム「観光は、大阪・茨木を元気にする」

所員 山 本 博 史

(地域創造学部教授)

2016年12月12日（月）に、茨木市観光協会と本学との共催で、シンポジウム「観光は、大阪・茨木を元気にする」を茨木市福祉文化会館（オークシアター）302号室にて開催した（参加者は94名）。福岡洋一茨木市長の挨拶、経営学部水野ゼミ生による「大学生が実施した北摂イメージ調査」の後、パネルディスカッションが行われた。

「観光をキーワードに、大阪を、茨木市を活性化（元気に）する方向性を探る」ことが、開催趣旨であったが、3名のパネリスト（溝畑宏氏：本学客員教授・大阪観光局理事長、山野寿氏：茨木市観光協会会長、安村克己氏：本学地域創造学部長）によるパネルディスカッションのテーマ「インバウンドと大阪の観光の活性化、そして茨木は？」に、インバウンドという語が含まれていること、また、大阪と茨木とが安易に対比されていることが議論の噛み合わなさを引き起こした原因ではないかと、観光に関しては門外漢ありながらもコーディネーター役を務めた筆者は考えている。以下においては、当日のパネルディスカッションにおいて何が問題であったのかを、各パネリストの主張を簡単に振り返りながら、再度考えてみたいと思う。



1. 溝畑 宏（公益財団法人大阪観光局理事長／追手門学院大学客員教授）

溝畑氏は、観光を「各地域の取組により、地域独自の資源を掘り起こし、それに付加価値を加え、広報や広告等により、全国、世界に通用するものをつくり、その結果、地域外（国内外）からヒト、モノ、カネを集めることにより、地域にとって持続可能な社会をつくる総合的戦略産業」として捉える（この観光の定義は、内閣府経済財政諮問会議の下位に置かれた「地域経済に関する有識者懇談会」での溝畑氏配布資料の中に登場するものである）。観光産業は裾野の広い産業であり、時間軸の延長（24時間化）や選択肢の多様化による消費の拡大、収益性・生産性の向上などによって経済活性化を図ることが可能だという主張は、国家的な経済成長戦略（アベノミクス）の文脈において捉えれば、非常に分かりやすいものである。

「ラグビーワールドカップ2019」、「オリンピック・パラリンピック東京大会」（2020年）、「関西ワールドマッスーズゲームズ2021」、IRの誘致や国際博覧会（万博）の開催などの大規模プロジェクトを背景に、大都市大阪においてインバウンドを拡大することが「大阪を活性化（元気に）する」という主張も、同じ文脈の中で捉えることができる。織田信長が大阪を「天下一の境地」と捉えた時代から、否、難波津・住吉津のあった古都大阪の時

代から、大阪はグローバルな志向性をもっていた。また、「文楽」に代表されるように、グローバルに受容されるローカルな特異なものが大阪には多くある。それゆえ、大都市大阪におけるインバウンドの拡大に関しては、大きな違和感はない。また、一段落した「爆買い」に代表される「大量」のイメージも、大都市大阪には違和感はない。

しかし、国家的経済成長戦略の中で語られる言わば〈大きな観光〉に関しては、腑に落ちないところがある。観光を経済成長戦略のツール（手段）としてのみ捉えることは、果たして妥当な捉え方なのであろうか。溝畑氏は、観光を「地域にとって持続可能な社会をつくる総合的戦略産業」と述べることによって持続可能性の問題に言及しているが、観光は経済活性化の手段だという主張と重ねて考えると、ここで言われている持続性は、経済成長（右肩上がり）の持続性という「旧来の成長概念」に根差したものであると言えよう。少子高齢化・人口減少社会が本格的に到来する日本の状況を考えれば、大阪市のような大都市であれ茨木市のような中小都市であれ、都市間競争・地域間競争に勝ち抜かなければ、都市・地域は衰退の一途をたどることになるという競争原理的な発想もここから出てくるのであろう。

2. 山野 寿（茨木市観光協会会長）

上記のような〈大きな観光〉に対して、茨木市観光協会会長の山野氏は、茨木市では、インバウンドの拡大という方向を直ちにとるべきではなく、身の丈に合った〈小さな観光〉を目指すべきだとの私見を披歴した。グローバルに受容されるローカルな特異なものや、大規模プロジェクトも茨木市には存在しないのだから、大都市大阪市のようにインバウンドを拡大するという方向をとることは茨木市においては困難だという認識が、山野氏の根底にあるのだと思われる。山野氏は、豊かな自然、豊かな歴史的資源・文化的資源が存在し、人の温かさがある「落ち着いたまち」であることこそが、茨木市の魅力であると述べているが、「ほっと いばらき もっと、ずっと」をスローガンとする「第5次茨木市総合計画」のにも同様のことが述べられている。

「第5次茨木市総合計画」には、「文化芸術活動を支援し歴史と伝統を継承する」とともに、観光資源の発掘・創出・活用によって「魅力あるまちづくりをすすめる」ことにより、交流人口を拡大する施策が記載されている。この総合計画が目指しているのは、経済成長（右肩上がり）の持続性ではなく、人の持続的な循環と地域経済の持続的な好循環である。こうした〈小さな観光〉の根底にあるのは、あくまでも活力と魅力のある「まちづくり」なのである。

このような「観光まちづくり」においては、茨木市のまち魅力発信課と茨木市観光協会との連携など、公民協働による魅力発信も重要であるが、それ以上に重要なことは、住民が自分の住んでいる地域の魅力を認識し、自分が住んでいる地域に誇りをもっていることであろう。魅力ある地域づくりの主体はあくまでも住民であるのだから、交流人口として観光客を受け入れる姿勢や観光客の受け入れ体制の大前提として、住民にシビック・プライド（Civic Pride）がなければ、魅力ある地域づくりはそもそも成立しないのである。山野氏の主張は、シビック・プライドに基づく主張であると筆者には思われた。

3. 安村 克己（追手門学院大学地域創造学部長）

安村氏は、観光の語源が『易経』の「観国之光 利用賓于王」であることから話を始めたが、安村氏の主張は基本的には山野氏の主張に非常に近いものであると筆者には思われた。安村氏は、1980年台初めに日本各地でスタートした「新しい観光振興と新しい地域振興」による「観光まちづくり」の事例を紹介しながら、地域に密着した観光、生活に密着した観光に言及していた。『易経』の「観国之光」は、「国の光を観る」（地域の魅力を観る）とも解されるが、同時に「国の光を観す」（地域の魅力を観す）とも解される。来訪者を受け入れる側が、自らの地域がもつさまざまな価値を「誇りをもって示す」という後者の解釈が成り立つためには、来訪者に対して、価値あるものとして示すに値する「地域の暮らしをつくる」という「まちづくり」が前提になっている。安村氏は、この意味での「観光まちづくり」の事例を紹介した。それらは何れも、経済成長に取り残され周回遅れとなった地域が、地域の伝統文化や自然・生態系を観光の魅力とし、地産地消や六次産業化を実践することによ

って成功した事例であった。シビック・プライドという点でも、観光まちづくりの主体は住民であるという点でも、安村氏の主張は山野氏と通じるものがあったように思う。

4. まとめ

三人のパネリストの発表を聞いて、観光に関しては門外漢であるが、筆者が今後検討すべき課題であると思ったことは以下の二点である。(1) 地域間競争という問題を孕む、経済成長という旧来の枠組みで〈大きな観光〉を考えるのか、地域経済の持続的好循環という「新しい成長」概念――成長という概念が相応しいかどうかは疑問であるが――のもとで〈小さな観光〉を考えるべきなのか。(2) 大阪市のような大都市と、茨木市のような中小都市や農山漁村とで、観光のあり方が同一でありうるのか。

今になって思えば、当日のチラシに記載されている「観光は大阪・茨木を元気にする」「インバウンドと大阪の観光の活性化、そして茨木は？」というテーマそのものの中に、実は、この二つの課題が暗示されていたのである。

プログラム

開会のご挨拶

福岡 洋一 茨木市長

大学生が実施した北摂イメージ調査報告

追手門学院大学経営学部・水野ゼミ学生

パネルディスカッション

インバウンドと 大阪の観光の活性化、 そして茨木は？

〈パネリスト〉

溝畑 宏 公益財団法人大阪観光局理事長(追手門学院大学客員教授)

山野 寿 茨木市観光協会会長

安村 克己 追手門学院大学地域創造学部長

〈コーディネーター〉

山本 博史 追手門学院大学地域創造学部教授

日時

2016年12月12日 月
19:00 ~ 20:30(開場18:30)

会場

**茨木市福祉文化会館(オークシアター)
302号室**

申込み方法

FAX: 072-641-7448 または メール: hsk@otemon.ac.jp
【定員100名 入場無料】 ※申込み詳細・アクセスは、裏面をご覧ください。

お問い合わせ

追手門学院大学 北摂総合研究所
TEL: 072-641-9723(研究・社会連携課: 平日9:00 ~ 18:00)
E-mail: hsk@otemon.ac.jp
追手門学院大学HP <http://www.otemon.ac.jp/>



主催 一般社団法人茨木市観光協会・追手門学院大学
後援 茨木市



茨木市観光協会



想像もしなかった自分史がはじまる

追手門学院大学

**観光は、大阪・茨木を
元気にする**

茨木市観光協会・追手門学院大学 共催シンポジウム

中国人観光客をはじめとしたインバウンドの増大は、「爆買い」が一段落したとはいえ大阪の経済に大きな影響を与えています。これまでは経済活性化のわき役だった「観光」をキーワードに、大阪を、茨木市を活性化(元気)にする方向性を探ります。

茨木市観光協会・追手門学院大学 共催シンポジウム「観光は、大阪・茨木を元気にする」ちらし